

ガーナのココア農業における 労働雇用について

—コプリソ村での調査から得たもの—

ほそ み しん や
細 見 真 也

はじめに

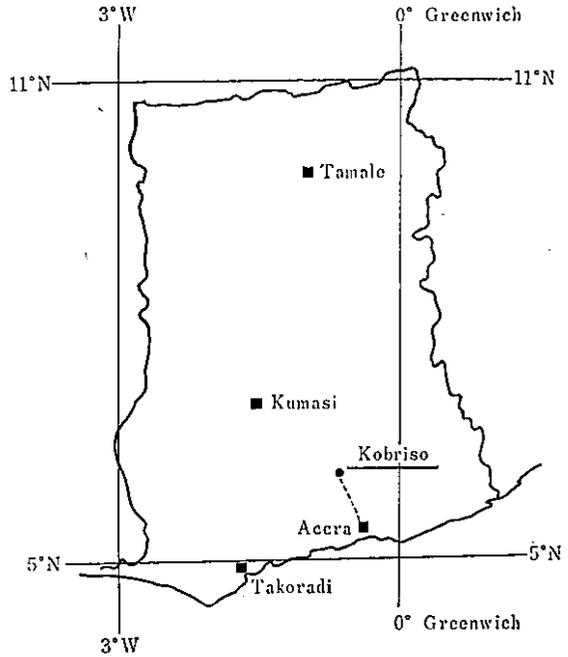
「ココア経済国家」という言葉があれば、ガーナはまさにそのとおりである。1879年この国に移入されたココアは、ガーナ小農民の努力と犠牲のうえに生産量の拡大がなされてきたのであり、1906年以来、ココアは一貫して輸出貿易の宗主たる位置をしめている。しかし、過去いくたびか試みられた「経済開発計画」も、ココア経済の不振・不安定の故に、いずれも当初の目標を達成することはできなかったのである。このような、低開発国における「モノカルチャ構造」を指摘することはきわめて容易であるが、その存在理由を問いかつ分析することは、決して容易ではない。

ところで、ガーナのココア農業に関する調査報告もすでにいくつかは公表され、またガーナ大学においても、Polly Hill 主任研究員を中心に調査研究が進められてきた(注1)。しかし、ガーナ・ココア農業に関する調査研究は、いずれもこの産業を支えている「農家」ないし「農民」の経済的主体性の側面からの分析を軽視している点では、共通したものがある。そこで、小稿においては、筆者が2カ年のガーナ滞在中に実施した農村調査の結果と、当該国政府が1955/56、および1956/57の両年度に行なった「農家経済調査」の結果から、「ココア農業における労働雇用」の実態を通してココア農家の経済的主体性の問題に接近したい。

なお、説明上の都合から、筆者が調査したコプリソ村(Kobriso)を「K」、1955/56および1956/57の両年度に、ガーナ政府により行なわれた調査地域を、それぞれ「A」および「B」と呼ぶことにする。

I K村におけるココア農家の実態(注2)

筆者の調査対象となったコプリソ村は、首都アクラ(Accra)の北北西約70マイルに位置するごく平凡な農村



ガーナ略図

であるが、全農家の8割に達する33戸が、筆者の聞き取り調査に応じてくれた。しかし、わが国においても、「農村調査」を行なう場合、農民の極端なまでの警戒的態度、猜疑心などに悩まされることが多いのであるが、このK村においても同じような農民の態度に苦しめられた。

具体的にいえば、「政府当局の依頼によって、農家経営の調査を行なおうとしているのではないか？」という疑念が非常に強かったということである。そのために、K村小学校に対する寄付金の贈与だけでは農民の疑念を解消させることはできなかったであり、K村広場において全農民を集め「調査の説明会」を行なったうえ、K村当局に対しても寄付金を贈与することが必要だったのである。しかし、結果的にみれば、農民自身からの調査に対する無言の非協力的態度は単なる「金銭欲」から出たもので、これを早く看破することができなかったのは筆者の負けであった。言い換えれば、「鴨がねぎを背負って来た」というように筆者は見られたわけであり、調査完了後においても、しばしば「献金」を要請されたのである。いずれにせよ、前後4回にわたるK村訪問とおよそ2週間の滞在とによって、K村におけるココア農家の実態を、「労働力雇用」の側面からつぎのように描き出すことができたのである。

すなわち、農業就業人口については、総数116人のう

現地報告

ち男子は47人で全体の40%強を占めるにすぎないこと、つまり女子労働力に対する依存度がかなり高いことが明らかになったのであり、また、1農家当たりの就業者は平均3.51人であることもわかった。さらに、全農家のおよそ80%に達する26戸の農家において、いわゆる「日雇い労働者」(day-labourer)の雇用が行なわれており、また、4戸の農家においては、「年雇い労働者」(annual-labourer)の雇用がみられた。すなわち、K村においては、ココア農家の90%以上が何らかの「雇用労働力」を投入しているわけである。これを、さらに詳細に観察すれば、「日雇い労働者」の場合、その賃金は3シリング、3シル6ペンス、および4シリング(邦貨ではそれぞれ約150円、175円および200円となる)と3種に分かれており、労働時間も5時間から8時間と4段階に分かれて行なわれているのであるが、午前7時から正午までの5時間労働で、4シリングの賃金というのがK村における「日雇い労働者」の平均的な雇用条件となっているようであった。そして、このような「日雇い労働者」の1農家当たり延べ雇用者数は、2人から35人までとバラエティーに富むものであるが、6割の農家においては、延べ6人以上の「日雇い労働者」が雇用されているのである。また、いわゆる「年雇い労働者」についてみれば、四つの農家ではそれぞれ1人、2人、3人、および4人の「年雇い労働者」を使用しているわけであるが、その「年俸賃金」は一つの例外をのぞいてはいずれも35ポンド(邦貨約3万5000円)の額で均衡している。

第1表 コブリン村家族労働者数

	実数(人)	比率(%)
男子	47	40.5
女子	69	59.5
計	116	100

第2表 コブリン村日雇い労働者賃金

	賃金率(シリング)	比率(%)
日雇い労働者(A)	3	24
"(B)	3.5	4
"(C)	4	72

第3表 コブリン村日雇い労働者の雇用状況

農家当たり雇用日数	1	2	3	4	5日以上
同比率(%)	44	11	15	7	23
農家当たり被雇用者数	1~2	3	4	5	6人以上
同比率(%)	11	19	37	11	22

第4表 コブリン村ココア農場保有数(農家当たり)

実数(枚)	1	2	3	4	5	6	7	8	12	16
同比率(%)	9	19	16	25	0	16	0	9	3	3
計	69					31				

第5表 コブリン村ココア以外の農場保有農家数

	1~2	3~5	6~8	12枚以上
cassava	16	9	3	0
maize	15	9	2	0
yam	13	2	0	0
cocoyam	19	11	1	1
plantain	19	8	3	2

(注) 第1表から第5表までは、いずれも、筆者の“An Observation on Labour Productivity of Cocoa Farmer—in case of Kobriso”, October 1963より。

つぎに、上述したK村における労働雇用の実態を被雇用労働者の側からみれば、「日雇い労働者」の場合、K村内の農家から供給される者と、K村以外の近隣農村から供給される者があるわけであるが、その比率はほぼ半々となっている。これに対し、「年雇い労働者」の場合には、アシャンティ地方(Ashanti)や北部州(Northern Region)など、K村以外の農村から移動してきた者ばかりであった。

つぎに、各農家の年間ココア販売額をみれば、160シリングから1万シリングに至る階層に分かれており、K村における農家1戸当たりのココア販売額は1598.6シリングとなる。また、これを家族労働1人当たり平均額で求めれば489.3シリングとなり、いずれにしても非常に低い額であることがわかる。また、全農家の76%ちかくの者が1600シリング以下のココア収入しかあげることができない状態なのである。

ところで、K村に限らず、ガーナ農民においては、自己の所有する農地を面積の概念で把握することがほとんど行なわれず、「枚数」概念を使うのが一般的である。したがって、この概念によってK村における農地の保有状態をみれば、農家1戸平均のココア農場保有数は4.42であり、ココア以外のcassava, yam, cocoyam, plantainなどの、いわゆる主要食料作物の農場の保有数は11.48枚なのである。つまり、K村においては、ココア農家はそのココア農場のおよそ2.6倍の、主要食料作物の農場を所有しているのである。しかし、ココア農場においては、いわゆるshade-treeとしてplantainをココ

アのあいだに作付けすることは一般的に行なわれることなのであり、また、先にあげた主要食料作物は、いずれも同一農場において互いに「混作」されることが多いという事実がある。したがって、K村における農場所有を「作付け農産物」の種別の側面からみれば、上述したような数字をうるるのであるが、農場そのものの「絶対数」として把握すれば、ココア以外の農作物のための農場は、1農家当たり4～5枚となるわけである。

II A, B両地域における農家の実態

いままでの説明によって、K村におけるココア農家の「労働力」ないし「就業」についての一断面が明らかとなったのであるが、これだけのデータにより、ガーナのココア農家における「労働力」ないし「就業」の一般論を展開することは危険である。

そこで、本節では、政府当局の実施した調査結果からA, B両地域におけるココア農家の実態を描き出したいと思う。

まず、1農家当たり家族労働力の投入状態をみれば、A地域では1.60人から2.28人であって、その平均は1.89人となり、B地域においては1.23人から2.95人の家族労働力が投入され、その平均は2.33人となっている。これに対して、被雇用労働力についてみれば、A地域では0.47人から3.34人、Bでは0.70から5.42人の投入が行なわれており、農家当たり平均被雇用労働力は、それぞれ1.39人および1.89人となっている。つまり、A, B両地域において、ココア農家の被雇用労働力に対する依存の程度は農業所得の階層別にはかなりの差はあるものの、平均的にみれば、Aにおいては42.3%、Bでは44.7%と、いずれも40%以上の労働力は被雇用労働力から得ていることがわかるのである。

つぎに、被雇用労働力に対する依存度を農業所得の階層別にみると、A地域においては、第1階層から第8階層まで、つまり全農家のおよそ92%においては、自家労働の投入が被雇用労働のそれを越えているのに対し、残りの約8%を占める、第9および10の階層においては、被雇用労働の投入が自家労働のそれよりも大きいのである。同様の事実はB地域においても見いだされるが、この地域の場合は、全農家のおよそ18%において被雇用労働への依存が自家労働の投入を越えている。つぎに、このような被雇用労働について詳述すれば、A, B両域では、Polly Hillの指摘したように、被雇用労働者はつぎ

の四つに分類される。すなわち、ココア農場の経営管理について全般的責任を負うものとしての caretaker, 経営管理における責任は持たないが、長期間の雇用関係にある労働者としての permanent labourer, また雇用関係からみて、いわゆる「日雇い労働者」と規定されるものは temporary labourer と carrier とに分類されるが、carrier は、収穫されたココアを農場から農家まで運搬するだけの仕事に従事するものである。そこで、このような分類に従って被雇用労働者に対する依存度を検討すれば、A地域においては、caretaker と permanent labourer の合計が全被雇用労働者のおよそ61%、temporary labourer と carrier は39%をしめているのに対し、B地域では、それぞれ、75%、25%となっている。つまり、A, B両地域において多少の差はあるものの、一般的にはいわゆる「年雇い労働者」に対する依存が高く、「日雇い労働力」への依存は相対的に低いものであることがわかるのである。これをさらに階層別の側面からみればA, Bいずれの地域においても、低所得階層で「日雇い労働力」への依存度が比較的高く、高所得階層においては「年雇い労働者」に対する依存の低いことが示されている。

つぎに、A, B両地域における「被雇用労働者」をその出身地方別にみれば、Aにおいては、同一地域（つまりA地域）内から供給されるものが全被雇用者のおよそ43%を占めるのに対し、Bではおよそ26%にすぎない。すなわち、A, B両地域とも北部州 (Northern Region) をはじめとする「他地方」からの「被雇用労働力」が大きな比重を占めているのではあるが、A地域においては同一地域内から供給されるものの割合がかなり高い、という特徴を示していることがわかる。また、両地域における被雇用者構成を男女別でみれば、A地域では「他地方」出身者のうち10%を女子が占めているのに対し、Bでは、その割合はわずかに0.8%にすぎない。この現象は、女子労働は一般的に流動的ではないという原則により、Bに対してAにおいては女子労働（被雇用の）の割合が高いことは、B地域に流入する被雇用労働は相対的に遠隔な地域から供給されるものが多いことを裏付けており、逆に、A地域にあっては、「他地域」から流入する被雇用労働者も、比較的近隣地方から供給される傾向を示しているものとみることができる。

つぎに、A, Bいずれの地域においても、大部分のココア農家が、いわゆる「賃金収入」を得ている事実に注目したい。

現地報告

まず、A地域についてみれば、農家当たり平均の賃金収入額はわずかに46シリングではあるが、階層別にはかなり特徴的である。つまり、第1、5、6および10階層においては平均以上の賃金収入を得ているが、他の階層

第6表 A地域の階層別労働生産性

階層	平均労働生産性 (シリング)	労働分配率	農家戸数	農家戸数比率(%)
1	320.82	0.250	93	8.7
2	482.65	0.520	172	16.0
3	588.00	0.538	197	18.3
4	642.37	0.460	221	20.5
5	726.38	0.510	99	9.2
6	937.44	0.474	68	6.4
7	965.24	0.401	65	6.0
8	963.01	0.584	75	7.0
9	1247.50	0.563	59	5.5
10	1783.68	0.653	25	2.3
計	765.94	0.565	1,080	100

第7表 B地域の階層別労働生産性

階層	平均労働生産性 (シリング)	労働分配率	農家戸数	農家戸数比率(%)
1	463.3	0.695	36	2.2
2	442.5	0.658	149	9.2
3	517.1	0.746	194	12.0
4	605.8	0.682	180	11.1
5	685.0	0.681	147	9.1
6	772.1	0.675	147	9.1
7	838.9	0.680	108	6.7
8	1,022.4	0.682	149	9.2
9	1,266.7	0.603	101	6.3
10	1,294.4	0.689	114	7.0
11	1,427.9	0.623	52	3.2
12	1,471.0	0.558	97	6.0
13	1,767.0	0.709	88	5.4
14	2,787.9	0.640	51	3.2
計	1,098.1	0.665	1,620	100

第8表 出身地域別雇用労働者の男女比率

	男		女		計	
	実数	比率(%)	実数	比率(%)	実数	比率(%)
A地域						
同地域出身	1,299	42.3	168	48.7	1,467	43.0
他地域出身	1,770	57.7	177	51.3	1,947	57.0
計	3,069	100	345	100	3,414	100
B地域						
同地域出身	1,206	25.1	46	60.5	1,252	25.7
他地域出身	3,598	74.9	30	39.5	3,628	74.3
計	4,804	100	76	100	4,880	100

においては平均水準をはるかに下回った賃金所得しか得ていないのである。このようなココア農家における「階層別賃金収入の中だるみ現象」は、B地域においてもはっきりと見いだすことができる。ついで、このような「ココア農家における自家労働の商品化」を、「雇用労働の投入」との関連において観察すれば、caretakerを雇用するココア農家のうち、A地域では50%のものが賃金収入を得ているのであり、Bではその割合は80%と圧倒的な高さを示している。これに対して、caretakerを雇用しないココア農家の場合、賃金収入を得ているものの割合は、A B両地域においていずれもおおよそ4%にすぎないのであり、まったく賃金収入を得ていないものは、それぞれ76%、79%なのである。

結 語

これまでの論述をまとめると、つぎのように言うことができる。

すでに、しばしば指摘されてきているように、ガーナのココア農業においては、その「雇用形態」、「労働条件」などには多少の差異はあるものの、いわゆる「労働の雇用」という事実がかなり一般的に存在するものであり、その賃金は平準化されたものであって、労働市場もかなり開放的、流動的なものであると言える。他面、ココア農家においては、その労働生産性、農業所得などにも相当の格差を見せている。そこで、これらの格差を解消する作用として、

- (1) 小規模農家からの「日雇い農業労働力」の供給
- (2) 中規模農家による「日雇い農業労働力」の需要という現象が一般的に認められるのである。

また、ココア農業における「労働需要の極端な季節性」のために、小規模農家といえども相当多量の自家労働を保有せねばならないと同時に、ココア収穫期においても自家労働の生産性は急速に低下する。そのため、自家の収穫作業が終了したのち、自家労働の一部は他の経営体へ一時的に流出するのである。

しかし、この場合でも、ココア農家としてはいわば「限界的経営体」であると見られるものも、完全に離村することは少ないのであり、これは、{cocoa(現金収入)+food(生活基本条件)} という図式によって説明されるように、農家経営が保障されているためなのである。

いずれにせよ、ココア農家において、小規模経営体では自家労働の商品化を通していわゆる主体的均衡への道を歩み、中規模経営においては、自家労働の完全燃焼化

第9表 雇労働に対する階層別依存率(%)

[A地域]					[B地域]				
階層	I	II	III	IV	階層	I	II	III	IV
1	40.4	29.8	17.0	12.8	1	71.4	1.1	27.1	1.4
2	56.1	3.6	23.2	17.1	2	61.0	5.2	26.0	7.8
3	51.0	1.9	29.4	17.6	3	54.9	12.6	24.3	8.1
4	51.1	3.6	29.9	15.3	4	54.5	6.2	30.3	8.9
5	52.9	5.2	25.8	16.1	5	57.3	2.6	29.0	11.1
6	49.7	7.0	24.2	19.1	6	62.9	5.3	25.3	8.6
7	47.7	7.4	25.0	19.9	7	60.3	8.2	21.1	10.3
8	61.7	5.2	18.2	14.8	8	70.5	5.2	19.2	5.2
9	62.0	8.2	16.8	12.9	9	68.9	8.4	14.2	8.4
10	72.4	7.2	6.3	14.1	10	47.6	38.2	9.1	5.1
平均	55.4	5.7	23.0	15.8	11	62.2	8.2	19.1	10.5
					12	64.8	15.0	14.2	6.0
					13	62.6	15.0	14.8	7.5
					14	69.7	14.6	8.1	7.6
					平均	64.0	10.6	18.0	7.4

(注) I……caretakers, II……permanent labourers, III……temporary labourers, IV……carriers.

(出所) 第6表から第11表までは、

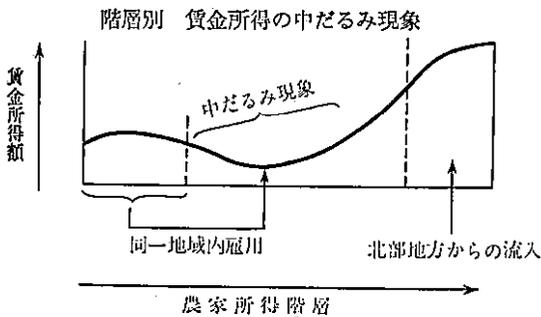
(1) Ghana, Office of the Government Statistician, *Survey of Population and Budgets of Cocoa Producing Families in the Oda-Swedru-Asamankese Area, 1955/56.*

(2) Ghana, Office of the Government Statistician, *Survey of Cocoa Producing Families in Ashanti, 1956/57.*

第10表 階層別賃金所得額

(単位: シリング)

階層	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	平均
A地域	50.2	0.6	19.6	25.7	48.8	98.7	27.3	19.6	35.8	728.0					46.0
B地域	—	—	39.9	53.7	71.6	27.8	17.7	30.9	7.2	21.8	87.2	43.3	47.3	50.1	37.6



および小規模経営体の供給する労働力を必要することを通して、ココア農家としての主体的均衡へ進みつつあると見られる。他方、大規模農家においては、自家労働と被雇用労働の生産力評価という必要に絶えず直面しながら、一部自家労働の完全離農ないし離村への方向を追求しているものと見る事ができよう。

(注1) Polly Hill, *Gold Coast, Cocoa Farmer*. Polly Hill, *Migrant Cocoa-farmers of Southern Ghana*.

(注2) Shinya Hosomi, "An Observation on Labor Productivity of Cocoa Farmer—in case of Kobriso". 1963年10月ガーナ大学経済学科研究会で発表す。

(調査研究部アフリカ調査室)

第11表 賃金所得農家における被雇用の形態(%)

	caretaker を雇用		caretaker を雇用せず	
	A地域	B地域	A地域	B地域
賃金所得のない農家	31.5	75.9	3.2	79.6
賃金所得を得る農家	50.1	3.8	80.7	4.1
他の非農業所得のある農家	18.4	20.3	16.1	16.3
計	100	100	100	100